

令和2年度に係る業務の実績に関する評価結果
国立大学法人佐賀大学

1 全体評価

佐賀大学は、地域とともに未来に向けて発展し続ける大学として、地域を志向した社会貢献・教育・研究を推進することで、地域活性化の中核的拠点となることを目指している。第3期中期目標期間においては、学生の能動的かつ主体的な学修を育み、総合大学の強みを生かした多様な教育かつ質の高い専門教育により、国際的な視野で変容する社会で活躍できる学生を育成すること等を基本的な目標としている。

この目標の達成に向け、学長のリーダーシップの下、データの可視化ツールを用いて「経営基盤」、「教学」、「学術」、「社会貢献」、「他機関の分析データ」の5つの分野について分析ツールを作成し、学内外データの活用基盤を整備するなど、「法人の基本的な目標」に沿って計画に取り組んでいることが認められる。

（「戦略性が高く意欲的な目標・計画」の取組状況について）

第3期中期目標期間における「戦略性が高く意欲的な目標・計画」について、令和2年度は主に以下の取組を実施し、法人の機能強化に向けて積極的に取り組んでいる。

- 教育学部、理工学部及び農学部において、佐賀大学版CBTシステムを利用した入試を実施するとともに、教育学部、理工学部では、過去3年の入試種別追跡調査を行い導入効果について分析している。また、芸術地域デザイン学部、経済学部及び医学部においては、試験の内容について検討し令和3年度に実施することを募集要項等で公表している。CBTシステムについては、九州工業大学、千葉商科大学、観光庁の外郭団体である一般社団法人宿泊業技能試験センターの3機関で採用されCBT試験が実施されている。また、CBTを活用した新しい評価手法の開発を進め、システム改修及びサンプル問題を作成することにより、第4期中期目標期間に向けてCBTを活用した新しい評価手法の開発に着手し、入学試験での導入可能性を検証している。（ユニット「高大接続改革」に関する取組）
- 令和2年度は、株式会社香蘭社と継続していた共同研究の成果として、複雑な形の陶磁器成形を可能とする新技術「自硬成形技術」を発明し、同社との共同特許として工業所有権（特許）を出願している。「自硬成形技術」とは、従来の鑄込み成形のような石膏型の吸水に頼ることなく、2種類の無機物質の少量添加と温度制御で、あらゆる形を型内で自己硬化させることができる画期的な新しい技術である。これにより、従来の鑄込み成形では難しかった複雑な形状の陶磁器製品の生産が可能となり、陶磁器製造工程のひとつの大きな壁（限界）を崩している。（ユニット「芸術と科学の融合による「やきものイノベーション」の創出」に関する取組）

2 項目別評価

<評価結果の概況>	特 筆	一定の 注目事項	順 調	おおむね 順調	遅れ	重大な 改善事項
(1) 業務運営の改善及び効率化			○			
(2) 財務内容の改善			○			
(3) 自己点検・評価及び情報提供			○			
(4) その他業務運営			○			

業務運営・財務内容等の状況

(1) 業務運営の改善及び効率化に関する目標

①組織運営の改善 ②教育研究組織の見直し ③事務等の効率化・合理化

【評定】中期計画の達成に向けて順調に進んでいる

(理由) 年度計画の記載10事項全てが「年度計画を上回って実施している」又は「年度計画を十分に実施している」と認められるとともに、下記の状況等を総合的に勘案したことによる。

令和2年度の実績のうち、下記の事項について注目される。

○ 指導的地位に占める女性の割合

女性教員の比率向上に対する取組として、「女性教員任用における公募の実施に関する申合せ」を策定しており、申合せに則って女性限定公募や女性優先公募を実施し、女性限定公募については3件で3名採用している。また、本申合せの目的を踏まえ、管理職に女性を積極的に登用したことで、指導的地位に占める女性の割合は、20.0%（令和2年4月現在）となっており、中期目標期間の最終年度における目標である「15%以上」を上回っている。

令和2年度の実績のうち、下記の事項について課題がある。

○ 会計検査院による指摘（不当事項）

会計検査院より指摘を受けている不当事項について、原因を究明して対策を講じるなど、再発防止に向けた取組は行われているが、引き続き再発防止に向けた積極的な取組を行うことが望まれる。

(2) 財務内容の改善に関する目標

①外部研究資金、寄附金その他の自己収入の増加 ②経費の抑制 ③資産の運用管理の改善

【評定】 中期計画の達成に向けて順調に進んでいる

(理由) 年度計画の記載6事項全てが「年度計画を十分に実施している」と認められること等を総合的に勘案したことによる。

(3) 自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標

①評価の充実 ②情報公開や情報発信等の推進

【評定】 中期計画の達成に向けて順調に進んでいる

(理由) 年度計画の記載2事項全てが「年度計画を上回って実施している」又は「年度計画を十分に実施している」と認められるとともに、下記の状況等を総合的に勘案したことによる。

令和2年度の実績のうち、下記の事項について注目される。

○ 学内外データの活用基盤整備（迅速かつ効率的なデータ収集・可視化）

令和元年度に導入したデータウェアハウス「Dr.sum」に保存するデータを拡充するとともに、可視化ツール「Motion Board」を用いて、「経営基盤」、「教学」、「学術」、「社会貢献」、「他機関の分析データ」の5つの分野について、データ粒度を動的に操作して可視化する分析ツールを作成している（全65種類）。これにより、学内外の最新データをリアルタイムで把握できる環境を整備しつつある。さらに、内閣府エビデンスシステム「e-CSTI」を積極的に活用し、他大学とベンチマーキングを行うことで、佐賀大学の立ち位置や取組の成果等を客観的に把握し、大学執行部へのフィードバックを行っている。

(4) その他業務運営に関する重要目標

①施設設備の整備・活用等 ②安全管理と環境 ③法令遵守

【評定】 中期計画の達成に向けて順調に進んでいる

(理由) 年度計画の記載7事項全てが「年度計画を上回って実施している」又は「年度計画を十分に実施している」と認められること等を総合的に勘案したことによる。

附属病院関係

(教育・研究面)

○ 令和2年度科学技術分野の文部科学大臣表彰

インプラント表面へのコーティング技術である「AG-PROTEX®」を応用した世界初の抗菌性人工股関節を京セラ株式会社と共同開発したことにより、令和2年度科学技術分野の文部科学大臣表彰の「科学技術賞（開発部門）」を受賞し、AG-PROTEXを応用した人工股関節は国内の6,000件以上の手術で使用され、不具合なく利用されている。

○ 新型コロナウイルス感染症に関する研究成果

株式会社サガシキと、特殊な素材を必要とせず、安価で大量生産が可能な紙製の使い捨てフェイスシールド「ハコデフェイスシールド」、「ハコデガード」及び「ハコデガードライト」を共同開発するとともに、「ハコデガード・ハコデガードライト」に関する論文が英文学術誌International Journal of General Medicine (I.F2.0) に掲載されるなど、新型コロナウイルス感染症対応に取り組んでいる。

(診療面)

○ 新型コロナウイルス感染症に関する取組

「新型コロナウイルス感染症陽性患者対応チーム運用マニュアル」を作成し、高度救命救急センター、麻酔科、呼吸器内科、循環器内科等、組織の枠を超えたチームとして陽性患者へ対応する体制を整えるとともに、看護部においては、重症陽性患者受入れの準備と適切な感染対策を念頭に院内感染防止や地域貢献等の職員派遣等を行っている。

(運営面)

○ 新型コロナウイルス感染症に関する取組

新型コロナウイルス感染症の院内感染を防ぐため検温スクリーニング部門を令和2年4月に開設し、来院された全ての方に正面玄関でサーモグラフィーでの検温とスタッフによる問診を実施し、症状のある患者を院外の診療用テント、又は区画整備された院内の感染症用診察室で診療するとともに、令和2年11月に佐賀県より発熱患者等の診療又は検査を行う診療・検査医療機関として指定を受け、インフルエンザ流行期に備えた発熱患者の外来診療・検査体制を取っている。